

平成 26 年度 学部 FD 推進事業報告書

標記のことに、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	文学部
事 業 名	授業改善及びカリキュラム改定の基本方針策定
平成 26 年度実務担当者名	柴田 紳一
事 業 の 概 要	
<p>【計画性】当初計画通りに事業を推進できたか？（いずれかにチェック）</p> <p><input type="checkbox"/>計画通りであった <input checked="" type="checkbox"/>概ね計画通りであった <input type="checkbox"/>あまり計画通りではなかった <input type="checkbox"/>計画通りではなかった</p> <p>（以下、<u>本年度の推進事業の概要</u>について、年初「申請書」の「内容」「目的」「計画」、及び前記【計画性】の自己評価、さらに別添の「経費執行表」における予算の執行結果に照らして記入してください。）</p> <p>平成 26 年度「学部 FD 推進事業」において、文学部は FD アンケートおよび FD 研修会を計画した。以下、それぞれの事業について報告する。</p> <p>1. FD アンケート</p> <p>当初計画（平成 26 年 2 月 12 日提出の申請書を参照）では、平成 26 年 9～11 月にアンケート用紙の作成を業者に委託し、同 12 月～平成 27 年 1 月にアンケートを実施となっている。引き継ぎの連絡が徹底しなかったことなどから、業者への委託および質問項目の確定が 12 月半ばにずれ込んでしまったが、アンケートは、予定通り 1 月中に実施することができた。</p> <p>昨年度は紙媒体とウェブ（K-SMAPY）の両方によりアンケートを実施したが、回収率が思わしくなかった点を反省し、今年度は各学科ごとに学則定員数程度の回答者数を割り当て、各学科教務委員に依頼して授業を指定してもらったうえで授業時間内にアンケートを実施し、確実に数を集められるようにした。その結果、各学科ともほぼ割り当て数の回答を確保し、計 650 件ほど回収できた。予算内で業者が処理できる件数は 1000 件と設定されたのだが、アンケート実施を依頼した時期が学年末にあたり、先に記した理由から、実施要領決定から実施までの期間が短かったため、上限数まで集めるにはいたらなかった。</p> <p>アンケートの最終的な分析結果は平成 27 年 6 月中に業者から報告される。本報告書を執筆している時点では中間報告まで入手している。その中で、カリキュラムおよび授業の改善に向けて参考になる、もしくは興味深い項目を 2 点ほど挙げる。</p> <p>1-(1) 授業に対する満足度</p> <p>授業の満足度を評価する際学生が重視する項目として、「授業内容と自分の興味の合致度合い」を重視すると答えた学生が 67.0%、「授業のわかりやすさ」と答えた学生が 56.0% に上り、他の項目（例えば「シラバスと実際の授業内容との合致度合い」、「専門的な授業内容」、「基礎を重視する授業内容」）より圧倒的に授業内容の面白さ、わかりやすさが重視されていること。シラバスなどの形式的なこと</p>	

より授業内容に学生の主たる関心が向いていることを示す。カリキュラムや授業改善では近年、形式的なことに重きが置かれる傾向があるが、これはひとつ見直すべき点である。

1-(2) 満足度の高い授業と低い授業

簡潔に言うと、満足度が高いのは学科の専門授業であり、満足度が低いのは教養総合科目、特に英語科目、加えて英語科目よりは少ないがテーマ別講義である。ただし、満足度の低さは満足度の高さほどはっきりと表れているわけではない（特に不満がないと答えた者が 154 名あり、これはテーマ別講義について不満足と答えた者よりも多い）。

しかし、教養総合科目、特に英語科目に対する不満足は明らかであり、この点をもう少し掘り下げた次年度はアンケートをとる必要がある。例えば、どういう理由で英語科目に不満を感じているのか（そもそも英語が嫌いだからか、授業の内容や方法によるのか）など具体的に調べる必要がある。

1-(3) FD アンケート実施方法についての反省点

2 月に提出した報告書ですでに述べた反省点を 2 点挙げ、対策も併せて記す。加えて、先の報告書時点では書かなかったことを 1 点追加する。

- ・「学部 FD 推進事業」の立案・申請は前年度中（1 月末）に行われ、実施の時には担当者が変更になっているため、引き継ぎに不都合が生じる。

- 平成 27 年度に向けては、平成 26 年度中に、翌年度留任となる教務委員の中から FD 事業担当者を決定した。

- ・アンケートの実施時期が遅いことによる問題。学科ごとに人数を割り当て授業中に実施するのは一定数のデータを確実に集める方法として良いが、学年末に実施するのは授業担当者への負担が大きいため避けた方が良い。

- 平成 27 年度はアンケート時期を早める。卒業論文に関する学生の意見を反映することができなくなる問題が考えられるが、可能であれば前期中にアンケートは実施したい。前期中の実施が望ましいか、可能かなどは新年度開始早々にも検討して、早めに決定する。遅くとも年内に実施したい。

- ・以下の FD 研修の項にも書いたが、「学生リアル調査」と重なる内容の質問が多い。近年この種のアンケート調査が頻繁に行われており、回答者（学生）の方にアンケート疲れが懸念される。それぞれの調査の特性に鑑みて、FD アンケートではもう少し絞った質問項目を設ける方が良い。

2. FD 研修会

FD 研修会は、計画立案当初は外部の講師等を招聘して行うことを考えていたが、委託する計画であった業者と日時の折り合いがつかず、断念せざるを得なかった。そこで、ちょうど「学生リアル調査」の結果が出たタイミングでもあったので、教務課と調整のうえ、「学生リアル調査」のデータから読み取れる文学部所属学生の実態を、主として教務事項に焦点をあてて検討する会とした。

テーマ：「学生リアル調査と学内データの統合・分析結果から見える文学部学生の実態について」

日時：平成 27 年 3 月 3 日（火） 16:00 - 17:30

場所：会議室 02

参加者：「学生リアル調査」プロジェクトチーム代表、教務課職員、文学部執行部および教務委員。

データ数が大きい「リアル調査」（文学部 FD アンケートは 650 件程度に対して、リアル調査は 5000 件超）と文学部 FD アンケートを双方参照するにより、文学部学生を含む本学学生が、文学部の専門科目及び文学部供出の総合教養科目に対してどういう期待を抱き、どういう不満を抱えているかについての全体像がつかめた。また、「リアル調査」のデータに基づく FD 研修会を通じて、学内のどの部署がどのようなデータを持っているのかもかなり明らかになった。